

# 東京バッハ合唱団 月報

[第535号] 2007年1月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.535  
January 2007

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## バッハは誰のものか？

「バッハ・カンタータ 50 曲選」の編集を終えて

大村 健二

昨年 11 月に第 5 期の CD4 巻を発行して、「バッハ・カンタータ 50 曲選」の日本語版楽譜（50 巻）と CD 選集（20 巻）の全巻が完結しました。1998 年秋の素案発表からちょうど 8 年が経過します。

まずは、この企画をさまざまな面でご支援くださり、お励ましくくださったすべての皆様、演奏と制作の面でご協力くださった方々に心よりの感謝を申し上げます。そして何よりも、遠い異国のアマチュア合唱団の取り組みに対し、貴重な版を底本としてご提供くださったブライトコプフ & ヘルテル社には、最大の謝意をお伝え申し上げますねばなりません。バッハと同時代に創設された楽譜出版老舗の破格の好意がなければ、そもそもこの事業は始まることもなかったはずで、このことには、後でもういちど触れることになるでしょう。

第 1 期の楽譜 10 曲が刊行された 2000 年に、これをもってライブツィヒのバッハ・ミュージアムを訪ねた際、所長のクルムピーゲル女史が「この企画は公的機関の仕事だ、なぜ個人ですか？」と驚いていたことを思い出します。事業の価値のこと、要求される作業の量と質のこと、財政的な規模のことなどをよく認識していらっしゃるだけに、日本という国に住むひとびとの、文化に対する想像力の特異さにずいぶんショックを受けていらっしやっただけです。

それにつけても、これらの企画の全過程を、ともに歩んでくださった団員一人ひとりの勇気に敬意を表させていただきます。完成をみた今後は、この事業の目的である「バッハ・カンタータ日本語演奏の普及」のために、できあがった 2 種のメディア、楽譜と録音、を活用する段階となります。大いに使いこなして、この取り組みを先へ進めて行ってください。

### 母語で歌う安心。安心は低級か？

ところで、こんなに大騒ぎしてまで、なぜ、わざわざ日本語でバッハなのか、この機会に、編集者として整理しておきたいと思えます。異論もあろうかと思いますが、さらに論を深めていただければ幸いです。

原語主義の根強い日本のクラシック音楽界には、外国の声楽曲はことばが難解だからこそ高級で、これを聴いたり歌ったりする人たちは特別の人、という誤解（ある

いは、思い上がり）がありはしないでしょうか。万が一あるとしたら、それは、少なくともバッハの教会カンタータ群にとっては、不幸な誤解です。

訳詞演奏を認めない立場からの見解は、おおむね以下のとおりです。作曲者は、原詞のイントネーションやアクセント、リズムから有機的に旋律をつくっている。バッハではとくに、歌詞の意味から旋律の形がつけられ、情感に密接した音色や和音が工夫されている、と。しかし、これらの評言は音楽というものの根本を語っているに過ぎず、後から新たな歌詞をつけるときに、その根本を無視して作業するのだとすれば、それは音楽的な営為を放棄したことに等しいのです。バッハ自身がパロディ手法を用いて、ラテン語からドイツ語へ、世俗歌詞から礼拝用の歌詞へと、同じ旋律を自在に使いまわしていますが、どちらがオリジナルかを聞き分けるのは至難でしょう。

むしろ、ここで軽視されている事柄は、「うた」というものの来歴の方ではないでしょうか。「おもい」の高まりから自ずと生じたものが「うた」なのだ、ということは誰でも知っています。「おもい」は、思想であったり、情念であったり、信仰であったりしますが、それを人にうたえ、伝えたいという心がきわまって「うた」が生まれます。『古今集』仮名序の冒頭に、「やまとうたはひとの心を種としてよろずの言の葉とぞなれりける」とあります（原文はすべてひらがな）。「和歌とは、心に胚胎し、おのずと育って、ことばとして表れたものだ」というような意味だと思えます。「うた」の本質に思いをいたせば、演歌であれ、ラップであれ、みな同じでしょう。したがって、強制されて歌う某国の「国歌」は「うた」ではあり得ません。

宗教的エリートに占有物であったラテン語聖書を、民衆の言語に置きかえることによって万人の財産としたマルティン・ルターが、やはり民衆のために、神への感謝や信頼、慰めなどを歌うコラール（聖歌）をつぎつぎと創作し、彼らの「おもい」に表象の手段を提供しました（コラールは、後にバッハ・カンタータの構造的支柱となります）このコラールがドイツの宗教改革を決定的なものとした、と言えるかどうか、民衆は、母が子を寝かしつけ、恋人が愛を語るときにつかうことば（俗語 = 非ラテン語）によって 5 節、10 節、ときにはそれ以上に連

綿とつづく詩節を歌い続けては、日常の苦難を去り、小さな幸福をこころの底から感謝したものでした。そのときに、辞書を片手に、あるいは対訳や字幕を追いつつでは、特別なことをしているという健気な快感か疲労感のほかの感動はあるのでしょうか。特別でない人々の場合、ことばが心と身体をゆり動かし、歌わないではいられないという経験は、「母語」をもって、せつなる「おもい」を語りかけているときにのみ得られるものなのです。特別な人々は「うた」が苦手です。

冗談だとは思いますが、「日本語で歌うのはかっこわるい」（音大生）という反応を聞いたことがあります。また、「ドイツ語で歌えば芸術だが、日本語だと宗教になる」（文化庁の役人）という迷言を聞かされたこともあります。前者に関しては、晩年のバッハ自身が、時代の趣味にとり残されていった経緯にも通じるもので、手ごわいものです。後者は、単なる無知とって笑って済ますわけにはいきません。宗教との対決を経験したことのない現代の日本人の芸術観は、反省を迫られています。明治維新前後のレベルなのかもしれません。

#### 訳詞は、立ち足るのか？

余人に代えがたい、とあって、絵描きのわが息子を取り立てた某国首都の知事がいましたが、表立って身内を称揚するのは恥すべきことです。したがって以下は微妙なことからです。

さて、前段の論旨は、訳詞それ自体がすぐれている場合にのみ言えることであって、そうでない場合は、意味が分ろうが分かるまいが、原詞で美しく歌わなければいけません。誤訳は論外です。原語主義のすぐれた点は、余計な解釈をしないうところにあります。翻訳は解釈です。これは、演奏＝解釈ということとは別の次元で言っています。

ドイツ語と日本語の単語では、音節の数に差があります。たとえば、読者の多くが旋律を思い浮かべてくださ

ると思われるので、カンタータ第 147 番のコラールを例にとりますと、有名な定旋律の冒頭は、Je-sus blei-bet mei-ne Freu-de, Mei-nes Her-zens Trost und Saft（イエスは私の喜びであり、私の心の慰め、養分です）と、前半 8 音節、後半 7 音節で作られており、われわれの訳詞では「イエス わが よろこび（8 音節） こころの なぐさめ（8 音節）」となっています。前半はともかく、後半では Saft（樹液、心を潤す養分）にあたる訳語が抜けています。この場合に、Saft の訳出を捨て、Trost（慰め）を捨てたのは、訳詞者の解釈です。自由詩のアリア部分などでは話は複雑になりますが、単純に言えば、このように、歌うための訳詞作業は、テキストの段階でも重大な解釈をせざるを得ない。その上に、旋律のどの位置にどの単語を置くか等々の課題が待っています。

では、訳詞者が、バッハの“真実”と、歌うもの・聞くものの“今”の間に、立ち足るのでしょうか？ 答えは、当然しかりです。パベルの塔での混乱以来、それが翻訳の宿命ですから。そして、違和感のある訳詞演奏にあたったときの情け無さと言ったら……。それを避けるためには、原語で演奏し、原語演奏を聴くに如くはないのです。次善は、訳詞者の貌が消えることではないかと思っています。

これは、非常に大事なことです。あたかも数百年以前から存在していたもののように、そこにあれば目障りではありません。われわれの言語共同体には、記紀・万葉で文字に定着するはるか以前からの、母語の工夫が積み重なっています。加えるに、バッハと教会カンタータにかぎって言えば、近代の「やまとうた」を完成させた明治以来のすぐれた詩人たちの業績と、新旧約聖書の翻訳、讃美歌創作の歴史とが蓄積された、「言の葉」の宝庫が目の前にあって、誰にでも開放されています。そこから最善のことばをひろって、しかるべき位置に置けばよいのです。しかるべき位置は、バッハの思想やバッハ音楽の力学によっておのずと決まります。これに成功すれば、訳詞者の貌は消えるのではないのでしょうか。

ブライトコプフ社との出版交渉の当初、楽譜の日本語版については、ドイツ語原詞を削除し、日本語歌詞だけを付すこと（すなわち日本国内だけに市場を限る）という条件が提示されていました。が、われわれとしては、原詞の下に英語やフランス語の訳詞の付された、例の臙脂色の楽譜のように（それ以前の版の、19 世紀風の表紙の楽譜も）ドイツ語/日本語、両方の歌詞がほしかったのです。われわれは、バッハのことばと異なることばをつかう国の享受者として、訳詞（母語）で歌い、かつ原詞で歌い、意味と音楽の流れの両方を味わいたい、ドイツ人が味わってきたように、と訴えました。ブライトコプフの著作権担当者ヴィヴィアン・レーマンから、あなたがたの楽譜を世界中で売ってください、という返事とどいたことは、われわれの楽譜を見ていただければお分かりいただけるでしょう。（団員：テノール）

後援会員・団員の皆さま

#### 《マタイ》公演ご招待について

たびたびご案内しておりますとおり、3 月の《マタイ受難曲》公演（創立 45 周年・第 100 回記念定期）は、多数のご来場が予想されますので、後援会員・団員の皆さまには、あらかじめ、ご来聴予定の有・無をお伺いしてから「招待券」をお送りしています。

勝手ながら、今回にかぎり、例年の「招待状」は割愛させていただきます。

招待券ご入用の方は、昨年 11 月号「月報」同封の「返信ハガキ」か、または直接お電話・ファックス等で、その旨、お早めにお申し付けください。お手数をおかけしますが、ご協力をよろしく願います。

招待券のご請求とお問合せ：合唱団事務局（電話 03-3290-5731、FAX 03-3290-5732）まで。

## 2006年の打ち上げ・・・

### 「50曲選」完成は、団員みんなの快挙

箕浦 邦子

東京バッハ合唱団の年末打ち上げ会が、12月16日(土)の練習後、桜新町の“ラ・ピアンタ”にて、世田谷中央教会牧師の安藤能成さま、後援会員の中澤富士子さま、安原美世子さまを来賓としてお迎えし、ソプラノ団員11名、アルト13名、テノール3名、バス4名の参加でおこなわれました。

お客様のお話や新しく団員になられた方々からの一言など、和やかに時が過ぎ行くなかで、ふと何気なしにこんなことを思いました。

昨年5月の定演後、精力的に練習をかさねている《マタイ受難曲》に大きく気をとられているけれども、もちろんのこと合唱団にとって記念すべき演奏会であり、立派に成功させなくてはならないことではありますが、2006年のもっとも記念すべき出来事は、“バッハを日本語で”との大村先生の熱望を、ご自身の神がかり的な作業のうちに早々と完成をみた、日本語版によるバッハの教会カンタータ・珠玉の50曲の、楽譜50冊、CD20巻の完成にあるのではないかと。このことは、合唱団としてのみならず、団内において一人ひとりの快挙であると信じます。完成おめでとうございます。

私はCDを入手するたびに通して聴いてきましたが、完結後は第1巻から順に、いつの定演のものが、自分の復帰前か後かなどを確認したり、また、この曲はもう一度歌ってみたいなどと思ったりしながら、仕事の合間に聴いて楽しんでいました。

とは言え、先生からの冬休みの宿題を待つまでもなく、今春3月21日の第100回記念定期演奏会に向け、《マタイ》の練習に励むことにいたしましょう。(団員:アルト)

## お・た・よ・り

鳥 正孝

バッハの青空が広がっています、八ヶ岳の上に。

「心の時代」のCD、そして先生の御著『東京バッハ合唱団30年の歴史』を御恵贈いただき、大変うれしく、心よりお礼を申し上げます。

しかし困りますね。家人に叱られながら、興味シンシン、眠るのも勿体なくて、もう半分以上読み進みました。後半は、週末の楽しみにします。

33年前から、信州の田舎に住んでおります。

田舎生活を選んだ理由の一つに、音楽を大切にしたいということがあります。土によごれた手を洗い、上京して聴く音楽。私は大変幸せです。金も地位も文化勲章も何も無いですが、満足しております。

3月21日のマタイ受難曲、今から心の準備をしてお待

ち申し上げております。

高原に小雪が舞いはじめました。ご多幸をお祈り申し上げます。感謝をもって、草々。(後援会員)

## 受難曲と美術作品

白木 博也(画家・後援会員)

### 死せるキリスト

横たえられたキリストの姿は、受難に痩せおとろえ、両手足の釘の傷痕とわき腹の槍の傷口は生々しい。

マンテーニャ (Andrea Mantegna, 1431頃 - 1506)

ミラノ、ブレラ美術館



カルパッチョ (Vittore Carpaccio, 1445頃 - 1525/26)

ベルリン、国立絵画館



## 年頭所感

### “非戦国 アズ・ナンバーワン”の決意

大村 恵美子

新年おめでとうございます。この1月号では、私は引用文を2つばかりご紹介させていただくことにします。

暮れに、ここ何年かの月報を読み直しているうち、5年前の私の一文に目がとまり、これこそ現時点での新年の日本人の決意として、そのまま通用するのではないかと感じました。この間にアメリカのイラク侵攻があり、それが予想通りに泥沼化して、アメリカ政府自身も方向転換の必要を認めざるを得なくなったのが、ようやく2006年の11月以後です。ひたすら無反省にアメリカに追随してきた日本政府は、何のコメントも発せず、親分の失態に困惑しているところです。

私の一文というのは、「『ジャパン・アズ・ナンバーワン』再考をいま」(月報 No.480、2002年6月号)で、もう一つは、数年前のこの論旨を裏づけてくれる内容の寺島実郎氏の「軽率に『核保有』を議論してはいけない理由」という最近の論述です(連載「脳力のレッスン」57、雑誌『世界』2007年1月号)。寺島実郎という方は、数年来、私が日本の首相になってもらえたらなあ、と思っている意中の人物です。

5年の年月を隔てたこの2つの文章をお読みいただき、わが国の進路に思いを馳せていただきたく、それぞれのコピーを、当月報に添えた形でお届けいたします。

---

### お・た・よ・り

木原 桃子

この度は、素晴らしいCDを送ってくださり、本当にありがとうございました。古いデジタル音源が、あのようにきれいな録音となり、現代のCDになるとは、驚きばかりです。

主人の音も、あんなにはっきりと蘇り、聴いていても何ともいえない気持ちになり、私も何回か石橋メモリアルホールに足を運んだことが懐かしく思い出されました。

主人が亡くなり早6年たちましたが、まだ覚えてくださっていて、送ってくださったお心遣い、感激いたしました。

Bach-Chor の尚一層のご発展をお祈りしております。

ご夫君の故・木原敬三氏は、合唱団の初期から、オーケストラのオーボエ奏者として、私たちの歌を支えてくださいました。オーボエは、バッハのカンタータのなかで、いつも作曲者の思いを託されて、重要な役割を担当しています。その思いを、木原氏は、繊細に、優美に、余すことなく表現してくださいました。「50曲選」CDの中にも、多くの録音を残してくださっています。(大村恵美子)

柳元 宏史

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その1>

### カンタータ第41番

(イエスをほめよ 新たな年に)

なんと晴れやかではないか。なんと清しいではないか。カンタータ第41番《イエスをほめよ 新たな年に》の演奏を聴き終えた率直な感想だ。

2007年の新年を迎えたこの時期に、ぜひこのCDを味わうことをお勧めしたい。東京バツハ合唱団による「日本語演奏によるバツハ・カンタータ50曲選」の第6巻に収録されている。

この曲は、カントールとしてのバツハが1725年の1月1日にライブツィヒで初演している。新年にふさわしい晴れやかな作品である。しかし、たんに晴れがましいだけではない。やはりバツハ、実に味わい深い。詞と旋律とが深いところで結びつき、洗練された演出にうなづいてしまう。

詞の内容は、いわれなく襲ってくる災いなど、人間の生きる現実を深く見据えながら、にもかかわらず、神をこころから信頼する内容で一貫している。そしてプロテスタントの信仰らしく、聖書のことば＝「み言葉」によって魂が潤され、本当の平和が与えられる信仰を告白している(第4曲、テノール・アリア)

聞きどころはなんとといっても、サタンを服さしめたまえ という合唱がバスのレチタティーヴォに織りかさなるところだ(第5曲、バス・レチタティーヴォと合唱)。一度しかない。しかもその合唱が絶句もの。深く集中した「祈り」の4小節である。神の前にその思いを純粹に注ぎだすような、とにかく美しい響きなのだ。お聞き逃しなく!

最後のコラール(第6曲)では、キリストの無力な十字架にならって、本当の平和が与えられることを祈り、新しいこの年に、主の恵みが豊かであることを心から願って曲を結ぶ。時を越えて、2007年のこの現代の新しい年の始まりにもふさわしい、ぴたりとくるカンタータではないだろうか。

5年間にわたる多くの方々のご様々な想いと祈りの結晶として、昨年暮れにこのCD選集が完結した。全50曲が20枚のCDに収められている。大村恵美子訳の日本語歌詞の付いた楽譜を片手に、これらのCDを味わうならば、一層立体的にバツハの表情が浮かんでくるに違いない。まだお聴きでないバツハファンのみなさまには、ぜひこの歴史的遺産を味わっていただきたい。新たな感動と発見、そして安らぎが与えられるのではないだろうか。

(団員：バス)

CD [第6巻]に収録：S 光野孝子、A 佐々木まり子、T 佐々木正利、B 渡邊 明、東京カンタータ室内管弦楽団、大村恵美子指揮・訳詞、1998年録音(第84回定期)。